
TRUE WISH

三九

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

TRUE WISH

【Nコード】

N01240

【作者名】

三九

【あらすじ】

便利屋を営む青年の許に、一つの依頼が舞い込んだ。

講義会開催中の雑用？　なんか地味な仕事だけど、どんな依頼でもこなすのがモットーさ。

相棒の少年と赴いた屋敷で、二人はある事件に巻き込まれる。

プロローグ

空から墜ちる稲光が、崩壊した建造物のシルエットを黒々と浮かび上がらせる。

辺りに散乱する焼け焦げた土壁の残骸と、切り裂かれた無数の肉片が、この場で起こった惨事を無言のままに物語っていた。

瓦礫の山の中で、形を保っているものが二つある。

一つは円筒型の小さな水槽。

もう一つは煤に塗れ汚れた白衣を纏っている初老の男だった。

その男は目の前の瓦礫をかき分け、無造作に転がる水槽を抱え上げた。

罅の入った水槽の側面から、ぬらぬらと光る黄緑色の液体が漏れだしている。

彼は慌てて中身がすべて漏れてしまわないよう、水槽を傾けた。

粘性のある液体が揺らぎ、その中に浮かぶ小さく歪な丸い物体が、波に合わせてゆらりと揺れる。

彼は涙に濡れる目で、愛おしそうにその物体を見つめた。

まるで初めて授かった我が子を見ているように、否、それ以上の、狂おしいほどの愛を込めて、彼は水槽をゆっくりと撫でる。

彼は水槽を抱きしめ立ち上がると、一転して憎しみを込めた瞳で天空を見上げた。

ごうと唸る風に乗って、痛い程に全身を叩きつける雨の中、男は叫ぶ。

「神よ！ 例えお前が私を認めなくとも、私は己の意志を貫き通す！ 私の道を阻むと言うならば好きにするが良い。だが私は、この願

いを成就させるまでは諦めぬぞ！」

雷雨は激しさを増し、男の志を薙ぎ倒そうとする。

稲光に浮き上がる男のシルエットは細く、神の意思でその身は簡単に折れてしまいそうだ。

しかし、その男は決して倒れることはなかった。

やがて彼は水槽を抱きしめたまま、何処へと姿を消す。

後に残されたのは、破壊された建物の残骸と、かつて人間だった無数の肉片。

そしてその下でじつと息を潜めていた、小さな少年だけだった。

第1話

ガタガタと音を立てながら、竜車が畦道を走る。

回転する車輪は小石を跳ね上げながら、荷台に乗った大量の荷物と乗り合わせている人々を揺らした。

北の山から吹き下ろしてくる風が、早い冬の訪れを告げている。風に靡く髪を片手で押さえ、グランツは未だ見えぬ目的地に目を向けた。

走竜が荷車を引く竜車には、三人の人間が乗っていた。

金髪碧眼の快活そうな若者、グランツ。

物静かな印象の少年フィーアは、銀に近い水色の髪を風に遊ばせ、分厚い本に視線を落としている。

竜車の手綱を握っているのは、黒髪を撫で付けた大柄な男性だ。名をヴァイデといい、これから向かう屋敷の使用人をしている。

彼らが目指しているのは、町外れの更に外れた場所にある、大きな館。

そこに一人の天才科学者が住んでおり、グランツとフィーアは、彼の依頼で屋敷に招かれたのだ。

ことの始まりは昨日にまで遡る。

便利屋を営んでいるグランツとフィーアは、暇を持て余していた。このところ、さっぱり依頼が入ってこないのだ。

幹旋所にも毎日足を運んでいるが、そこにも二人に回される仕事はなかった。

「ああゝ、このままじゃ俺ら、一文無しだぜ……」

「そうですね」

「そしたら何も食えなくなっちまうぞ？
なあ、フィーアのこと食っていい？」

「嫌です」

格安民宿の一室で、先程から不毛な会話を繰り広げている。
グランツはテーブルに突っ伏したまま、盛大に溜め息を吐いた。
ベッドに腰掛けて本を読んでいるフィーアに目を向ける。

朝日を反射して、フィーアの髪は銀色に輝いて見える。
見た目は少年のフィーアだが、グランツが物心ついたときから、
同じ家で変わらぬ姿のまま暮らしていた。
年齢を訊くと、グランツの八つ上だと答えるのだが、どう考えて
も外見と釣り合わない。

グランツは今年二十歳になったのだから。

グランツは徐に立ち上がり、フィーアの隣に腰掛ける。
本を読んでいたフィーアは、視線を感じて顔を上げた。

「なんですか？」

「ほら、今日も仕事がないから、俺たちの愛を育もうかかって」

グランツの言葉を聞いた瞬間に、フィアは呆れたように彼を見上げた。

何故かグランツは、子供の頃からフィアに熱愛宣言をしてきたのだ。

大人になったらフィアを嫁にすると、声を大にして叫んでいたのだが、如何せんフィアも男である。

その都度全力で聞き流していた。

強く否定しなかったのがいけなかったのだろうか。

大人になったグランツは、以前よりも積極的に迫ってくるようになった。

今日も今日とて、半眼で睨むフィアの腰に手を回し、身体を密着させてくる。

教育を間違ったのだろうか、馬鹿な息子を見つめる親の心境で、フィアはグランツのキスが降ってくる前に立ち上がった。

狙いが外れたグランツは前のめりにベッドに倒れる。

「馬鹿なことを言っていないで、幹旋所に行ったらどうです？」

腕組みしてグランツを見下ろし、フィアは眉間に皺を寄せた。

幹旋所とは、フリーの傭兵や何でも屋等に仕事の依頼を紹介する施設だ。

グランツたちも度々幹旋所の世話になっている。

「でもどうせまた無依頼だぜ。行くだけ無駄だっつの」

「無駄かどうかは、行ってから決めてください」

半身起こして口を尖らせるグランツを部屋に残し、フィーアはさっさと幹旋所へ向かってしまった。
グランツも慌てて後を追う。

民宿の外には冷えた朝の空気が満ちていた。
もう季節はすっかり冬で、北の山から吹いてくる冷たい風に乗って、粉雪が舞っている。

風に乗って飛んで行く花卉に似ていることから、風花と言っらしい。

以前、フィーアから聞いた。

「さみい……フィーア、あつためて」

「お断りします」

往来でも構わず抱きついてくるグランツを、フィーアは力の限り押し返した。

民衆の冷たい視線が集まる前に、歩みを早めて行ってしまう。
取り残されたグランツが後ろから追ってくる足音を聞きながら、フィーアは幹旋所の扉を開けた。

「丁度良かった。急ぎの依頼が入ったんだが、受けてくれるかい？」

ここ数日ですっかり顔馴染みになった窓口業務の男は、依頼内容の書かれた紙を片手に営業スマイルを浮かべた。
今日の朝早くに、新規依頼が届いたらしい。
グランツは書類を受け取り目を通す。

そこに書いてあった仕事というのは、とある屋敷での雑用だった。医学会で話題の天才科学者、トイフェルの住居で、三日間の小さな講義が行われるそうだ。

その期間と、前後の準備と後片付けのため、屋敷内の清掃や来訪者への接客を依頼するものだった。

「トイフェル……悪魔ねえ……嫌な名前付けられたもんだな、この人」

依頼者の欄を眺めつつ、グラントはぼそりと呟いた。
窓口の男性は契約書を広げてペンを用意する。

「どう、やるだろ？ あんたら毎日来てたもんな。三食宿付き、五日間の短期業務よ？」

「もっちゃん。やるやる！」

二つ返事で頷き、フィーアに確認もしないまま、グラントはペンを受け取り契約書にサインする。

横からフィーアが覗き込み、契約内容を黙読した。
そこでふと、あることに気付く。

「契約日は明日からですか？ 随分遠いところのようですが、箱車は出ているのでしょうか？」

箱車とは、走竜が引くものではなく、可燃性の燃料を使い自動で走る箱のような荷車のことだ。

現代科学の代表とも言えるものであり、公共の乗り物として、町中の移動手段となっている。

当然、町外れの田舎道は走っていない。

屋敷のある場所は、簡易地図を見る限り、町外れの更に向こうである。

民家などない、森の中なのだ。

そこに行くための交通手段がなければ、歩いて行くしかない。

たどり着けない距離ではないが、かなり大変な道程になるだろう。

フィアの危惧することを察した受付の男は、グランツの書いた契約書を受け取って、安心しろと笑った。

「大丈夫だって。明日の朝九時にここの前において。屋敷の使用人が、竜車で迎えに来てくれるから」

フィアもそれならいいと頷き、グランツと共に幹旋所を後にした。

翌朝、幹旋所の前で立っていた二人の許に、一台の竜車が近付いてきた。

何やら大荷物を乗せた荷車を引いている。

どうやらあれが、屋敷からの使いのようだ。

「お前さんたちか？ 雑用を引き受けてくれたのは」

そう声をかけてきたのは、黒髪を撫で付けた背の高い男だ。

黒いボトムスに白いシャツ、黒のジャケットという出で立ちは、いかにも屋敷の使用人といった風だ。

グランツは御者台に座った男を見上げ、頷いた。

「ああ。俺はグランツ、こっちはフィーアだ」

自分の胸元と隣に立つフィーアとを交互に指差す。
フィーアは軽く会釈した。

御者の男は顎に手を当て、彼らを見て眉をひそめた。

「どうかしたか？」

それに気付いたグランツが声をかけると、男は何でもなかったように話を続けた。

「いや。俺はヴァイデだ。トイフェルの屋敷で使用人をしている。
まあとにかく後ろの空いてるところに乗りな」

肩越しに荷台を指し示すが、そこには大量の食料が乗っており、
人が乗るスペースなどほとんどない。

グランツとフィーアは顔を見合わせ、足元にある野菜が入った袋
を退かしてちよこんと腰掛けた。

二人が乗ったのを確認してから、竜車は再び走り出す。

二足歩行の竜が引く荷車は緩やかに動きだし、町の景色を背後へ
と運ぶ。

屋敷が町から遠いため、度々ヴァイデが食料を買い出しに町まで
出向いているのだ。

今回も、ヴァイデが買い出しがてら、幹旋所に仕事の依頼を届け
にいったらしい。

「お前さんら、二人で仕事してるのか？」

「おう。もう三年くらい一緒に仕事してるかな」

「三年と二ヶ月です」

竜車に揺られている時間は長い。

三人は時折他愛ない会話をしながら、トイフェルの屋敷を目指した。

その途中、ヴァイデがちらりとフィーアを盗み見る。

彼の口許には笑みが浮かんでいた。

「……何ですか？」

それに気付いたフィーアが、読みかけの本から視線を外し、ヴァイデを睨むように眉を寄せる。

元々目付きが鋭いので、本人にそのつもりはなくても睨んでいるような目になってしまふのだ。

ヴァイデは片手を振って何でもないと示す。

しかしやはり、ちらちらとフィーアを見てはくすりと笑っている。気に障った訳ではないが、そう何度も見られると気になるのだらう。

フィーアは本を閉じてヴァイデに顔を向けた。

「僕に何か気になることでも？」

ヴァイデは苦笑いを浮かべて肩をすくめる。

「いや、悪い悪い。お前さんがあんまり可愛い顔してるもんだから、つい覗き見したくなってな」

「……は？」

フィーアが目点を点にする。

そこに食い付いたのは、日頃フィーアは俺の嫁宣言をしているグランツだった。

「おいおいおい、うちの相棒に色目使うなよな。フィーアは俺のよ……」

「貴方は黙りなさい」

またしても熱愛宣言されそうになり、フィーアは慌てて持っていた本をグランツに投げ付けた。

背表紙が顔面にクリティカルヒットして、グランツから苦痛の叫びが上がる。

これが某玩具メーカーのゲーム画面だったなら、勝利のファンファーレと共に、フィーアがレベルアップしているところだ。

まあしかし、実際そんなことでレベルが上がる訳でもなく、フィーアは顔を赤らめて、風に乱れた髪を手で押さえた。

誰も聞いていないところでふざけた愛を叫ぶならまだ良い。

しかし、人前でそんなことを言われた日には、顔を隠して全力で逃げるしかできないではないか。

羞恥心というものをどこかに置き忘れてきたとは思えないグランツの言動に、フィーアは振り回されてばかりだ。

そんな二人のやり取りを見て、ヴァイデは豪快に笑った。

「はっはっはっ、こりゃ参ったね。せつかく口説こうと思ったのに、既にコブ付きか」

「貴方も変なこと言わないでください」

恥ずかしさから早口でまくし立て、フィーアはそっぽを向いてしまふ。

それから屋敷まで、グランツとヴァイデが何を話し掛けても、フィーアは返事をしなかった。

昼頃になりようやくたどり着いた屋敷は、森を背負った広大な土地に聳え立っていた。

一週間足らずとはいえ、その期間雑用をこなすのは、かなり重労働になると思われた。

屋敷内の掃除だけでも何時間かかるか……

あんぐりと口を開けて屋敷を見上げるグランツたちを余所に、ヴァイデは買い込んできた食料を運び込んでいく。

グランツたちもようやく我に返り、ヴァイデを手伝った。

「で、雑用って何からすればいい訳？」

肉の塊を巨大冷蔵庫に押し込みながら、グランツはヴァイデに訊いた。

ヴァイデは野菜の入った大箱をチルド貯蔵庫に仕舞いながら答える。

「とりあえず、講義の会場の掃除と、受講者の泊まる部屋の掃除だ

な」

今回の講義は小規模なもので、受講者の数も少ない。集まって数人程度ということなので、食材の格納が終わり次第、手分けして各部屋の掃除を始めることにした。

「んじゃ、フィーアは宿泊部屋の掃除頼むわ。んでグランツは……」

ヴァイデが二人を部屋に案内しようとしたとき、キッチンの扉が開いて、一人の女性が入ってきた。

赤い髪が印象的で、フィーアよりも更に鋭い目付きをしている。くわえた煙草を指で摘み、ふうっと紫煙を吐き出した。

「はあいヴァイデ。そちらお客さん？」

ハスキーボイスの女性は、入り口に立ったままヴァイデに手を振る。

ヴァイデは笑顔でそれに答えた。

「いんや、今日から雇った雑用」

「ふうん……」

その女性はカツカツと床を踏み鳴らし、グランツたちに近付く。二人の前まで来ると、無遠慮に眺め回した。

「な、何だよ？」

耐えきれなくなったグランツが、思わず身を退き、目を逸らす。フィーアは微動だにしない。

その女性は摘んだ煙草を再びくわえ、ケラケラと笑いながら頷いた。

「うんうん、あんたは確かによく働いてくれそうだね。

あたしはミーラン。ここの料理人だよ」

言われてみれば、その白い服や前掛け、スカーフは、確かに料理人の衣装である。

言動が賭場の姐御然としていたため、まったく気付かなかった。

「しっかり働きなよ。あたしが美味しい飯たらふく食わしてあげるから」

「お、おう」

長い睫毛を打ち鳴らすようなウィンクを贈られ、グランツは多少引きつった笑みを返した。

本能が告げている。この手の女性に逆らうと、後が怖い。

「さて、今度こそ掃除に……っでも、もう昼飯の時間だね。

んじゃ、とりあえず屋敷の案内だけしてくるから、飯よろしくな」

ヴァイデがミーランに片手を挙げて合図を送ると、彼女は力強く豊満な胸を叩いた。

「任せときな」

ミーランに見送られ、グランツとフィアはヴァイデに連れられて厨房を後にする。

やたらと広い造りの屋敷を、ゆつくりと見て歩いた。

まず、裏口から入って厨房及び食料貯蔵庫へ、そこから出てすぐに食堂がある。

食堂から広間へは扉一枚で繋がっており、広間を出ると短い通路があつて玄関ホールに続いていた。

そこから左右に廊下があり、南側が講義のための広い部屋。北側には実験室が並んでいる。

ホールの脇から壁を伝うように階段があり、二階は屋敷の住人の部屋と、客室が占めていた。

一番奥の部屋はトイフェルの資料室になっていて、そこだけは立ち入り禁止にされている。

使用人であろうと、勝手に入ると怒られるのだそうだ。

一通り見て回ってから、食堂に戻る。

ミーランが食事を用意して待っていた。

「お帰り。冷めないうちに食べな」

ただのまかない食なので、然程豪華な食事ではない。

しかし、ここ最近仕事もなく、まともな食事すらしていなかったグランツたちには、とんでもないご馳走であった。

「うっは、美味そう！ いただきますーす」

「……いただきます」

食堂の長いテーブルの端に座って食べ始める。

ミーランはトレイに乗せた一人分の食事を、ヴァイデに渡した。

「はい。旦那様、また部屋に籠もって研究してるんでしょう？
どうせこっちは来ないから、持ってたてやって」

グランツたちが屋敷に来てからも、屋敷の主であるトイフェルは姿を現さなかった。

屋敷を見て回る途中、ヴァイデに尋ねたのだが、研究に打ち込むとしばらく部屋から出てこないのだそう。

明日からの講義のため、最終チェックをしているのかもしれない。

「あいよ。まったく、あの旦那にも困ったもんだねえ」

ヴァイデは苦笑を浮かべながら、主人のための食事を運んでいった。

それを見送ってから、ミーランはグランツの隣に腰掛ける。

片手で頬杖をついて、じっとグランツを見つめた。

「な、何？」

流石に黙ったまま見つめられると、食べにくい。

グランツはミートソースの Pasta を飲み込み、ミーランの視線から逃げるように肩を退いた。

「うつん、別に。あんた、いい男だねえ。口説いていい？」

ふぼっ！

ミーランの言葉を聞き、グランツは思わず嘔き出した。
向かい側にいたフィーアが、思い切り顔をしかめる。

「なななげふっ、何言ってるんだよ！？ 本気！？」

グランツはむせながらミーランの目を見る。

赤い髪とは対照的な青い瞳が、グランツを見つめていた。

「本気本気。あんた、面白いわねえ。本気でからかいたくなっちゃ
うわ」

本気なのか、からかっているだけなのか、その真意は定かではな
い。

からかっている方に五千点賭けて、グランツは引きつった苦笑い
を浮かべた。

「冗談きついなあ……ねえ、冗談ですよねお姉さま？」

恐る恐る紡がれた言葉は、ミーランの声にかき消される。

「冗談で言ってるように見える？」

「いやっ、ちよっ……フィーア！ 黙ってないで助けるよ！」

一縷の望みをかけて救いを求めたグランツだが、救いの主はナプ
キンで口許を拭い席を立つ。

「ご馳走様でした。僕は先に客室の掃除に行ってきます」

これで、人前で一方的に愛を囁かれるのがどんな気分になるか解
るだろう。

言葉に表さなくとも、フィーアの言いたいことははっきりと読み
取れた。

グランツは藁にも縋る思いで手を伸ばしたのだが、その藁はどう

やら、根元からぽつきりと折れてしまったようだ。

一人で焦るグランツを尻目に、フィーアはさっさと先程案内された客室に行ってしまう。

「あ、あ、あ、そんな。俺の嫁はフィーアだけって決めてるのに」

遠くにグランツの悲鳴を聞きながら、フィーアは再度顔をしかめて溜め息を吐いたのだった。

一人黙々と部屋の掃除をしているフィーアの許に、ヴァイデが訪ねてきた。

換気のために開けっ放しだったドアの前に立ち、軽く扉を叩く。

「よう。どうだい調子は？」

「別に……」

窓を拭く手を止め振り返るものの、相手をするつもりはないようだ。

フィーアは仏頂面でぶつきらばうに答える。

ヴァイデは無愛想な様を気にすることもなく、笑みを浮かべてフィーアに近寄ってきた。

「さっきはうちの姐さんが失礼したね。お前さんの旦那はちゃんと解放してきたから、安心しな」

「誰が旦那ですか」

どうして自分の周りには、こういうおかしなノリの連中が集まるのだろうか。

フィーアは半眼でヴァイデを睨み、相手をするだけ無駄、とでも言うように窓拭き作業を再開した。

背後から、ヴァイデが更に近寄ってくる気配を感じる。

背筋に悪寒を感じる程近く、フィーアの左耳の側でヴァイデの声がした。

「なあ、おたく、兄弟とかいる？」

耳元で囁かれ全身が粟立つ。

フィーアは左耳を庇うように素早く振り向き、予想通り近くにあったヴァイデの顔を睨み上げた。

「……何故そんなことを訊くのですか。貴方に教える必要性を感じません」

フィーアはじりじりと後退りするが、すぐ後ろは窓である。

早々に逃げ場をなくし、横にずれてヴァイデの視線から逃れようとした。しかし。

「つれないねえ。俺が連れてきた便利屋が、どんな人物なのか知りたいだけさ」

ヴァイデはフィーアの顔の横に手をつき、彼の退路を阻む。

顔の脇に置かれた手に一瞬だけ目を向け、フィーアは益々険しくなった顔つきでヴァイデを睨む。

だがヴァイデは涼しい顔でフィアを見つめている。

じっと見つめられ、フィアは思わず顔を背けた。
横を向いて俯いたフィアに、ヴァイデが手を伸ばす。
顎を掴まれ、無理矢理上向かされてしまった。

「何を……」

「可愛い子を口説こうとしてるだけさ」

ヴァイデの顔が近づく。

フィアの紅玉のような瞳に、ヴァイデの顔が映り込む。
吐息を感じる程に距離は縮まり、しかし唇が触れる前に、フィアは窓を拭いていた布巾をヴァイデの顔に押し付けた。

「うぼっはっ！ おえっ、ひ、酷いことするな……」

思わず身を退いて、ヴァイデは布巾を押し付けられた口元を袖で拭い、盛大にむせた。

フィアが念入りに窓を磨いた布巾である。

埃も汚れもしっかり染み付いていることだろう。

「酷いですって？ あなたからそんな言葉を聞けるとは思いませんでした」

涼やかな声に嫌味をたっぷりトッピングして、フィアはヴァイデを睨む。

意思の確認もせず、無理矢理唇を奪おうとしたのだ。当然の報いである。

ヴァイデはポケットから取り出した真っ白なハンカチで口を拭い、気持ち悪そうに吐く真似を試みせた。

「だからって、ゾーキン押し付けることないでしょうよ……」

情けない声で同情を引こうとしているのか、むせて涙目になったヴァイデは懲りずにフィアに近付く。

口許を覆っていたハンカチをポケットに仕舞い込み、フィアの目の前で足を止めた。

「はい、ここはお互い御免なさいして、水に流そうじゃないか」

しゃあしゃあと言つてのける辺り、どうにもつかみどころのない男である。

フィアは怒りを通り越して呆れてしまったようで、軽く肩をすくめ作業に戻ろうとした。

その肩を、ヴァイデが掴んで振り向かせる。

「っ、何ですか？」

「いや、その首飾り……」

ヴァイデの視線は、フィアの首許に注がれていた。

正確には、フィアの首に付けられている宝石に、だ。

フィアの首には、赤く丸い珠を金属で挟んだだけの、簡単な首飾りが付いている。

その大きな宝玉は子供の握りこぶし程もあり、首から下げるには大きすぎると思われた。

フィーアは片手で首飾りを隠し、ヴァイデの手を振り払った。

「ただの飾りですよ。」

仕事の邪魔です。早く行ってください」

フィーアはヴァイデから逃げるように、部屋の隅へと移動してしまふ。

ヴァイデは軽く息を吐き、頭を掻きながら部屋を出ていった。

フィーアが部屋の掃除を終えた頃、グランツも一階の掃除を終えたようだった。

揃いの借りたエプロンを身に付けたまま、二人は客を迎えるため、玄関ホールへと走った。

先程から、ドアノックの音が聞こえている。

「お待ちせいたしました」

フィーアが玄関の扉を開けると、そこに立っていたのは、やや小柄な若い男性だった。

どこかの研究員なのだろうか。

上から羽織っただけのコートの下に、清潔そうな白衣が見え隠れしている。

その男性は人の良さそうな笑みを浮かべて、軽く会釈した。

「こんにちは。ボクはツアルトといいます。トイフェル博士の講義

に参加する者ですが……」

フィーアは掃除が終わった直後に見せてもらった、来客名簿を頭の中で捲り返す。

その名前は、確かに記載されていた。

「はい、伺っております。それでは、まずお部屋にご案内させていただきます。グランツ」

言いながら、自分の後ろに立っていたグランツを呼ぶ。

グランツはフィーアが意図することを察して、ツアルトに手を差し出した。

「お荷物預かりますよ」

「あ、どうもすみません」

ツアルトは持っていた鞆をグランツに渡した。

部屋に案内するのは、グランツの仕事だ。

グランツが歩きだす前に、フィーアがこっそり顔を寄せてグランツに耳打ちする。

——階段右、四番目の部屋。

それぞれの部屋の場所まで把握しているのだ。

グランツは、どうしても覚えられなかった。

後でもう一度、名簿を見せてもらう必要があるだろう。

グランツは言われた通り、ツアルトを部屋まで案内する。

時刻はもうすぐ夕方。

これから続々と、講義に参加する客が訪ねてくるだろう。

玄関から外を見ると、先程まで晴れていた空に、黒い雲が広がりとつある。

今夜から明日にかけて、雨が降るだろう。

来客が雨に濡れるといけないから、タオルを用意しておこうか。そう思いながら、フィアは玄関の扉を閉めた。

それから続けて、二人の客が来た。

いかにも紳士といった顔つきの壮年科学者と、魔律協会主席の若い女性だ。

魔律とは、科学とは正反対の理論のことで、呪文により因果律を乱し、炎を生んだり氷を降らせたりする、不思議な力のことである。そのこの主席協会員であるリーリ工は、科学にも興味があるのだそう。

壮年の科学者はフォルターといい、医療に役立つ科学の研究をしているという。

トイフェルの人工四肢研究を見たくて、遙々やってきたのだそう。

フォルターが屋敷に着いた直後から、雨が降り始めた。

来客は、あと一人。

タオルを用意しておいて良かったと思いながら、最後の客の到着を待つ。

しばらく経つても、最後の客は来なかった。

気にはなったが、他の客たちを待たせる訳にもいかない。

グランツとフィーアは、食堂の準備を始めた。

白いテーブルクロスを敷き、人数分のナイフとフォークを並べる。グランツが椅子を並べている間に、フィーアは造花を一輪、花瓶に挿して飾った。

グランツは客を呼ぶために、二階へと上がる。フィーアは調理場からパンとスコーンを持ってきて、皿の上に並べた。

丁度並べ終えた頃、グランツが客人たちを連れて食堂に入ってきた。

三人の客は、グランツが開けた扉から中に入り、整えられた部屋を見渡す。

「へえ、やっぱり広いのね。これだけでつかい屋敷持つてくるくらいだから、料理は期待できそう」

そう呟いて、真っ先に席に着いたのはリーリエだ。

磨き上げられた銀食器を眺め、早々とナプキンを広げている。

他の二人も、それぞれ席に着いた。

「参加者はこれだけですか？ 随分少ないですね」

自分の他に二人しかいないテーブルを見回し、ツァルトがぽつりと呟いた。

それに答えたのはフィーアだ。

「もうお一方来られる予定でしたが、到着が遅れているようです。到着時刻がいつ頃になるか連絡がありませんので、一先ず皆様のお食事の用意をさせていただきますました」

「あ、そうなんですか？　なんだか悪いですね」

「どうぞお気になさらず。すぐにお食事をお持ちしますので、しばしお待ちください」

もう一人の客を気にしているのは、ツアルトだけのようだ。他の二人は、今回の講義について話している。

「そういえば、トイフェル先生は……」

ふと、フォルターが主賓席を見て呟いた。

客が遅れるのはともかく、主催者が姿を見せないのはどうなのかと、その目が言っている。

それに答えたのもフィーアだ。

「申し訳ありません。主人は研究で部屋に籠もっておりまして、しばらくは出てこれられないようなのです」

トイフェルは研究に熱が入ると、三日以上部屋から出てこないこともある。

科学者たちの中でもそのことは知られており、フォルターもそれならば仕方ないと納得したようだ。

フィーアとグランツが一度食堂から出ると、料理の乗ったワゴンを押したヴァイデが歩いてくるところだった。

「俺たち、ひよつとして給仕もするよう？」

「当たり前だろ。ほれ、運ぶの手伝え」

ヴァイデに言われて、グランツは再び食堂の扉を開けた。

食前酒をグラスに注ぎ、アントレにはキャビアとスモークサーモン、チーズのカナッペを振る舞う。

ポタージュは素材の旨味を引き出した、温かな味わいのオニオンスープだ。

ポアソンにはこの時季が旬になる白身魚のクリーム煮を用意した。口直しのソルベは甘さを控えた紅茶のシャーベット。

続いて瑞々しい若菜をふんだんに盛り付けたムスクランに、香味の効いたドレッシングを添える。

丁度そのとき、玄関ホールからドアノッカーを叩く音が聞こえた。グランツはフィアに後を任せ、玄関の扉を開けるために急いで食堂から出ていった。

玄関ホールに行くと、来客はノッカーではなく扉を直接叩いて喚んでいた。

「誰かおらんのか！ 早くここを開ける！」

「はい、只今」

グランツが急いで扉を引く。

そこには怒りの形相で立っている、初老の男がいた。

来客予定の最後の一人、シュレツケン博士だ。

シュレツケンは雨に濡れた帽子を取り、いかにも不機嫌な表情で

中に入ってきた。

グランツはフィーアが用意しておいたタオルを手渡し、荷物を受け取る。

鞆も随分濡れているが、厚い革のお陰で中は無事だろう。

「ああまったく、何でわざわざこんなところに来なきゃなんのだ」

シュレツケン は白髪 の混じり始めた灰色の髪をタオルで拭きながら、独り言と言つには大きすぎる声で文句を言っている。

嫌なら来なきゃいいだろう。とは、いくらグランツがお調子者でも言えない。

流石に、ノリで喋れる相手かどうかくらいは理解している。

「まったく忌々しい。雨など降りおつて。

おい貴様、早く部屋に案内せんか！」

いきなり怒鳴られて、グランツははっと我に返る。

そうだ、このオッサンを部屋に連れていくのが仕事なのだ。すっかり忘れるところだった。

「まったく、何をばーっとしとるんだ！

この屋敷にはまともな使用人はおらんのか？」

グランツはこめかみがひきつるのを感じた。

これが仕事でなかったら、勢いで一発どついているところである。なんとか営業スマイルを全開にして、シュレツケン を部屋まで案内した。

部屋の扉が荒々しく閉められ、シュレツケン の恰幅の良い身体が

消える。

その途端にグランツは目と眉を吊り上げ、青スジの立ったこめかみを痙攣させながら中指をおっ立ててやった。

その後すぐに食堂に戻ってきたものの、とてもではないが、にこやかに給仕などできる気分ではない。

フィーアには悪いとは思ったが、食堂には入らずに厨房でしばらく気分を落ち着けることにした。

サボタージュではないのかと問われれば、否定はできない。だが不機嫌な顔のまま客人の前に立つのも、失礼な話である。

厨房の扉を開けると、暖かい空気が流れてきた。火を使う場所だから、廊下よりもずっと温度が高い。

「あらん、どうしたのさ。客にセクハラでもされて逃げてきたの？」

ハスキーな女性の声がする。

屋敷の料理人ミールランが、デザートのスフォンケーキに生クリームを添えているところだった。

「げっ、お姉さま……」

グランツは口許を引きつらせて呻くが、考えてみれば料理人のミールランが厨房にいるのは当たり前だ。

サボる場所を間違えたようだ。

「げ、とは何さ。ほらこれ持ってって。」

どーせサボりに来たんでしょ？」

「何故ばれてるし……」

グランツはミールランが何もしてこないことにほっとしつつ、出されたデザートを食堂に運んだ。

甘いものを食べる気はしないが、こうして見ていると腹が減る。

自分たちの食事は仕事が終わってからだから、まだまだ先である。

どうかこの、自己主張まくっている腹の虫が客人の前で騒ぎま
せんようにと祈りつつ、グランツは食堂の扉を開いたのだった。

第2話

講義初日は、朝から雨だった。

昨夜から降りだした雨は激しさを増し、今や豪雨となって館の屋根を叩いている。

講義の部屋に集まった客人たちは、出されたお茶を飲みながら、主役となる科学者の登場を待っていた。

「トイフェル博士って、どんな方なんですか？ 実はボク、実際にお会いしたことはないんですよ」

「私もだよ。あの人は滅多に人前に出てこない人だから、今日を楽しみにしていたんだ」

「そうなの？ まあ、あたしも見たことないけど。シュレツケンさんは会ったことあるんですね」

「ふん、いけ好かない奴だよ。わしとは気が合わんというだけで、研究室から追い出しおって」

「ってことは、以前は同じ研究室にいたんですか？」

「へえ、それは初耳だ。昔はどんな研究をしていたのか、是非お話を聞きたいですな」

参加者たちが雑談で盛り上がる中、部屋の扉が開いてグラントが入ってきた。

その後ろに、もう一人若い男の姿が見える。

皆の声がぴたりと止み、二人の方に視線が集まった。
グランツは背後の男性を部屋に招き入れてから扉を閉める。
それから、持っていた分厚い資料を参加者たちに配った。

「お待たせしました。皆さん、ごゆっくりどうぞ」

営業スマイル全開にして愛想を振り撒き、なるべくシュレツケンの方は見ないようにしている。

また何か文句を言われたら堪らない。

その間に、グランツの後ろから部屋に入ってきた男性は、講義のためにしつらえた壇上上がる。

この日のために、ヴァイデが突貫工事で作ったものだ。

「やあ、どうも。皆さん、遠路遥々ようこそおいでくださいましたな。

私がトイフェルです。さっそく、講義の方を始めましょうかな」

参加者たちは、皆一様に目を丸くした。

トイフェルが最初に国から表彰されたのは、今から二十年も前のことである。

どう考えても五十は過ぎているはずなのに、彼の外見はどう見ても二十代後半くらいにしか見えない。

中でも一番驚いているのが、唯一トイフェルと面識があつたシュレツケンだった。

「な、なんじゃ貴様その姿は？」

目を見開いて凝視するシュレツケンを見て、トイフェルは悪戯が成功した子供のように笑った。

「ふふふ、ああ、シュレツケンじゃないか。久しぶり。
実はアンチエイジングサプリの研究もしていてね、自分で飲んで
るうちに、こうなっちゃった訳」

軽く両手を挙げて肩をすくめるトイフェルを、シュレツケンは何
惑したように眺めていたが、やがてふんと鼻を鳴らして目を逸らし
た。

逆に興味深そうにトイフェルを見つめているのはリーリエだ。

「サプリ飲むだけでそんな若返っちゃうの？　すごい、それ、も
う発表してるんですかあ？」

「いやあ、まだなんだよ。それにこれも、ある種の病気の治療のた
めに研究を始めたものだから、一般には出回らないと思うけど」

「なあんだあゝ……発売したら買おうと思ってたのに」

楽しい会話はここまでだった。

講義が始まると、途端に専門的な言葉が飛び交い、グランツには
何かの呪文のようにしか聞こえない。

昔流行ったサロンのように、少人数で趣味の合う者同士が集まっ
ただけあり、講義の内容も随分濃いものになった。

グランツにはまったく内容が理解できず、そつと部屋から抜け出
した。

静かに扉を閉めて振り返ると、そこにミーランが立っていた。

「うおわっ！」

「人の顔見て驚かないでよ失礼だね」

両手を腰に当て、彼女はグラんツを睨むように見上げる。
グラんツは多少引きつった顔で愛想笑いを浮かべた。

「いや、その、目の前にいたからびつくりしただけだって」

決して彼女の顔に驚いた訳ではない。

そこにいたのがフィアでも驚いただろう。多分。
いや、条件反射で抱きついたかもしれないが。

「まあいいわ。今、暇？　ちょっと頼みたいんだけど」

また逆ナンパされるのかと警戒していたグラんツだが、どうやら違ったらしい。

単に仕事の話のようだ。

「何？」

「生ゴミ出してきたほしいの。雨降ってるから」

土砂降りになっている外を指差し、ミーランはあっけらかんと言
い放った。

ゴミ捨て場は、屋敷の裏の森の中にある。

そこまで荷車を押していくだけでも大変なのに、しかもこの天気。
ミーランが行きたくないのは解るが、グラんツだって行きたくない。
い。

しかし、そこは臨時雇われの便利屋のサガ。
何でもやってこそその便利屋なのだ。

「うえゝ……わかりましたよゝ」

グランツはあからさまに嫌そうな顔と声で答える。
それを見てミーランは苦笑した。

「悪いね。終わったら、あったかいコーヒー煎れてあげるからさ」

大変な仕事でも、ご褒美があるなら頑張れるというもの。
確かにミーランのコーヒーは美味しかった。

グランツは渋々ながら、ゴミ出しのために厨房の裏手へと急いだ。

グランツが講義の部屋に向かったとき、フィーアは客室の掃除をしていた。

参加者が講義を聞いている間に、部屋を綺麗にしておかねば。

一流ホテルとまではいえないが、この屋敷の滞在中に不備があつてはならないと、ヴァイデからも言われている。

フィーアはまず、シュレツケンの部屋の掃除から始めた。

「……………」

客室のドアを開けた瞬間、フィーアは絶句した。

シュレツケンの部屋は、たった一晩でよくぞここまでと誉め称えなくなる程にちらかっていたのだ。

よくもまあ他人の家をこれだけ汚せたものである。

まるで、何かを探してもいたのか、引き出しからゴミ箱まで、すべてひっくり返っている。

フィーアはとりあえず、床に落ちているゴミの処分から始めることにした。

こうして片付けをしていると、また背後からヴァイデが来るのではないかと心配になるが、彼は今、町へ行っているはずである。帰ってくるまでは、心置きなく仕事に集中できるというものだ。早くもいっぱいになりつつあるゴミ袋の口を縛り、フィーアは気合いを入れて箒を手を取った。

「おいおいおい……マジかよ……」

町に向かったはずのヴァイデは、その途中で竜車を停めた。彼が見つめる先には、雨で増水し、無惨にも流された橋の残骸がある。

川幅は広く、しかも流れは急で、無理に渡ろうとすれば簡単に流されてしまっだろう。

今日はトイフェルが注文していた機材を受け取りに行くだけだったので、少しくらい遅れても構わないが、町へ通じる唯一の道が失われた今、屋敷で急病人でも出たら大変なことになる。

急いで屋敷へ戻り、町の役場に連絡しなければ。

電話線が切れていないことを祈りつつ、ヴァイデは来た道を引き返した。

グランツは黒いレインコートを羽織り、溜まった生ゴミを荷車に乗せて屋敷を出た。

雨は激しくグランツを打ち付けるが、それに構わず歩を進める。屋敷の裏手に広がる森の一画、木陰の目立たないところに穴が掘

られており、そこには沢山のゴミが捨ててあった。
グランツも荷車のゴミバケツを下ろし、引っ繰り返す。
昨日と今朝のゴミや残飯が、小さな山を作った。

軽くなった荷車を引いて、グランツは屋敷へと戻る。
屋根の下に入ってから、ようやく一息つけた。

「お帰りー。ご苦労さん」

厨房の裏口からミールンが顔を出す。

グランツは濡れたレインコートを軒下に干してから中に入った。
約束通り、ミールンはコーヒーを煎れて待っていたようだ。
手を洗ってから、差し出されたカップを受け取る。

「さつみいゝ……こりゃそのうち、雪になるんじゃないの？」

「かもねえ……それより、大丈夫だった？」

熱いコーヒーに息を吹き掛けながら、ミールンが訊ねる。
ただのゴミ捨てに大丈夫も何もないだろう。
グランツは一つ瞬きをして、コーヒーを啜る。

「大丈夫って……何が？」

ミールンもコーヒーを一口飲んでから、悪戯っぽく笑った。

「いやねえ、この森、狼が住んでるのさ。餌を探してゴミ捨て場の
辺りをうろつくのよねえ」

「んなつ、それを早く言えよ！」

グランツは思わずコーヒーを噴き出しそうになった。解っていれば、用心のために銃を携帯していったものを。うっかり丸腰で出てしまった。

幸い、狼には遭遇しなかったが、危険なことこの上ない。

「無事だったんだからいいじゃない。それに、こんな雨の中じゃあ、奴らもおとなしくしてるって」

調理台に寄り掛かり、ミーランはコーヒーを一口飲み下す。

グランツは眉間に皺を寄せながら、コーヒーの残りを一気に呷った。

「ご馳走さん！ 俺、部屋の掃除してくるわ」

傍らのテーブルにカップを置き、グランツは肩をいからせて厨房から出ていく。

ミーランは手を振って見送った。

「いつでも煎れてあげるからさ、気が向いたらあたしの部屋においでよ。夜明けのコーヒーご馳走するよ」

笑顔で手を振るミーランの目が、ギラリと怪しく光ったように見えて、グランツは慌てて厨房を後にした。

フィーアがようやくシュレッケンの部屋のゴミを片付けた頃、グランツが客室のある二階に上がってきた。

開け放たれたドアから部屋の中にいるフィーアを見付けて、グラ

ンツが笑顔で近寄ってくる。

「フィーア、手伝うよ」

フィーアは塵取りの中身をゴミ袋に入れながらグランツを見上げた。

近付いてくる足音を聞いて、またヴァイデが来たのかと警戒していたのは、グランツには秘密だ。

キスされそうになったなんて知られたら、またぞろグランツが大騒ぎすることだろう。

「そうですか。では、ツアルトさんの部屋をお願いします」

言いながら、フィーアはいっぱいになったゴミ袋を二つ抱える。

可燃ゴミは、屋敷裏の焼却炉で燃やすことになっていた。

全部の部屋の掃除が終わってからまとめて処分するつもりなのだろう。

まずは、邪魔にならないように裏口にゴミ袋を置いてこなくては。

大きなゴミ袋を抱えるフィーアを、グランツが呼び止めた。

「俺が持つてくよ。重いだろう？」

「これくらい大丈夫ですよ」

しかしフィーアはグランツには構わずに部屋を出て行くところ。グランツはしつこく食い下がった。

「あ、じゃあ、半分持つよ。一緒に行こうぜ」

「仕事の効率が悪くなります。あなたは残って清掃をお願いします」
にべもなく断られた。

フィーアの言う通りではあるのだが、グランツには決して譲れないものがある。

それは何かと問われれば、もちろん恋人との時間である。

「何だよー。ここの仕事忙しくて一緒の時間少ないんだから、こーゆーときくらい一緒にいたいと思うだろ？」

と言っても、そう主張するのはグランツだけで、フィーアは彼の恋人になったつもりはない。

眉間に皺を寄せてグランツを睨み付け、部屋を出ていった。

慌ててグランツが追い掛けるが、フィーアはすかさず振り向いてきっぱりと言い放った。

「来ないでください仕事の邪魔です」

そう言うすとすたと歩き去ってしまった。

取り残されたグランツは、名残惜しそうに肩を落としたまま立っていたが、このまま何もしないでいるとまたフィーアに怒られる。

仕方なしに、部屋の中に置き去りにされた箒と塵取りを取りに行った。

二人で協力すれば、仕事も早い。
どうにか、午前中の講義が終わる前には客室清掃も終わった。

一階の部屋も、講義が行われている部屋以外は完了だ。

こうなると、昼食の準備ができるまでは暇になる。

グランツとフィアは、与えられた部屋で休憩をとることにした。

「あー、さみー。フィア、あつためて」

「お断りします。そんなに寒いなら、暖柱でも抱いてたらどうですか？」

冷たく言い放ち、フィアは部屋の隅にある黒い柱を指差した。

この柱は熱を伝えやすい金属を含んだ石できており、屋敷のどの部屋にも必ず設置されている。

裏庭の地下倉庫に、親となる太い柱が立っており、それに熱を加えることで子柱が暖められ、部屋の温度を調節するのだ。

機械など一切使っていない。

魔律の技術を使っているのだ。

古くは魔法と称されたこの技術は、呪文と呪紋を使い、この世の万物を構成する因果律を操るものである。

科学と同じく、未だ発展途上にある技術で、詳しいことは解明されていない。

しかも、呪文と呪紋さえ覚えれば誰でも使えるような代物ではない。

因果律を崩壊、再構成させるだけの魔力がなければ、魔律は発動しないのだ。

この暖柱のような簡単なものならば、柱という媒体を通して律が発動するため、一般家庭でも用いられている。

ほんのり熱を発する黒い柱を眺め、グランツは嫌そうに溜め息を吐いた。

「やだよ。なんかあれ、触ったら火傷しそうじゃなか」

「しませんよ。多分」

フィーアは徐に立ち上がり、備え付けのポットで湯を沸かし始めた。

各部屋には簡易キッチンが設置しており、お茶や軽食程度ならば自分たちで作れるようになっていた。

熱板と呼ばれる金属を内側に貼り付けたポットは、火に掛けなくても簡単に湯が沸くので、旅人に重宝されている代物だ。

これにも魔律の技術が使われている。

「グランツ、砂糖は？」

「一つ」

慣れた手つきでお茶を煎れるフィーアを見ていたグランツは、ふと窓の外に目を向けた。

相変わらずの土砂降りで、景色などほとんど見えない。

屋敷に来たときは、この窓から裏の森がよく見えていたのだが。

グランツがふと、何とはなしに空を見上げた瞬間、空が薄紫色に光った。

あっと思ったときには、巨人が太鼓を叩きつけるような轟音が鳴り響いていた。

近くに雷が落ちたのだろう。

この雨ならば山火事の心配はないが、この屋敷に落ちたら大変だ。避雷針は装備されていただろうか、少し心配になる。

そのとき、背後でカシャンと小さな音がした。フィーアがティースプーンを落としたらしい。雷に驚いたのだろうか。

グランツはフィーアの許へ駆け寄る。窓の外では、再び雷が轟音を響かせていた。

グランツは床に落ちたスプーンを拾って、ポットの隣に置く。そしてフィーアをそっと抱き寄せた。いつもならば抵抗するはずなのに、今回は何故かおとなしい。

「大丈夫だつて。俺が傍にいるから」

グランツは静かに囁き、優しくフィーアの不揃いな髪を撫でる。フィーアは小さく頷き、しばらくの間グランツの服の裾を握り締めていた。

フィーアは昔から嵐の日を、とりわけ雷を嫌った。怯えていると言ってもいい。

グランツが一度理由を訊ねたこともあったが、嵐の日には嫌なことがあったから、としか言わなかった。

一人震えるフィーアの傍には、いつもグランツが寄り添っていた。それは当然の役目だと言わんばかりに、ずっと。

グランツが幼い頃から、何度でも。そしてフィーアも、それが当たり前のようにグランツに背を預ける。

普段は邪険ににしているフィーアだが、このときばかりはグランツを追い払おうとしない。

そして気分が落ち着いてくると、決まってこう言うのだ。

「すみません……」

雨音に掻き消されるくらいに小さな声で、フィーアが呟いた。

窓の外では稲光が輝き、部屋の前には一人の女性が立っている。

「あんたら、そういう仲だった訳？」

ハスキーボイスに驚いて二人が振り向くと、いつの間にドアを開けたのか、そこにミールンが立っていた。

フィーアははっと我に返りグランツから離れる。

「いえっ、そのっ……な、何か御用ですか!？」

慌てて取り繕うが、最早手遅れというものである。

しかしミールンは気にした様子もなく、顎を使って二人を呼んだ。

「飯だよ。食堂に運ぶの手伝いな」

それだけ言って階段を降りていくミールンを、二人は慌てて追い掛けた。

夕食と違って、昼食は簡単なものだった。

パンにスープパスタ、サラダにデザートといったランチメニュー。トイフェルたちはすっかり講義に熱中していたらしく、グランツが呼びに行くまで昼食の時間だと気付かなかったらしい。

あれだけぶっ続けで講義を聞いていたというのに、食堂に来ても

まだ研究の話で盛り上がっている。

「午後は人工皮膚の合成と、人工四肢の関節部への疑似神経伝達回路のことについて話そうかね」

「神経伝達ってことは、義肢が動くんですか？」

「細かい動きまで再現するのは大変だけど、ペン回しくらいならね」

「充分凄いですよ先生！ 神経管には何を使っているんです？」

「はっは、そういった詳しいことは、資料を見ながらにしようか。あ、紅茶おかわり」

何やら難しい話が飛び交い、グランツは頭から煙を噴き出しそうになりながらも、どうにかトイフェルのカップに紅茶を注いだ。

フィーアならば会話の内容も理解できるのだろうが、彼は今、講義室の片付けに行っている。

本当はグランツが行きたかったのだが、ミーランに捕まってしまったのだ。

グランツが愛想笑いを浮かべてお茶のおかわりを注いでいる頃、フィーアは一人で講義に使われる部屋を片付け、午後から使用する新しい資料を並べていた。

ぱらぱらとページを捲って見てみたが、とても高度な技術が使われており、博識なフィーアでも理解できない部分が多い。

早々に片付けを終えて部屋を出たそのとき、玄関の扉が勢い良く開かれた。

「うーっ、寒い寒い」

両手をこすり合わせながら入ってきたのはヴァイデだ。
その瞬間に目が合つて、フィーアは少しだけ顔をしかめる。
昨日の一件から、すっかり苦手意識が植え付けられてしまったよう
うだ。

ヴァイデは濡れず濡れのレインコートを脱ぎ、ポケットからハンカ
チを取り出す。

湿っぽくなっていたそれで、顔と頭を拭った。

「ああ、酷い目に遇った……その可愛子ちゃん、タオル持つてき
てくれる？」

フィーアは一瞬だけ嫌そうな顔をしたものの、素直に乾いたタオ
ルを取りに行った。

ヴァイデは受け取ったタオルで豪快に頭を拭く。

玄関ホールには、彼の靴から滴る泥水で水溜まりができていた。

「いやあ参ったね。後でお客さんにも言わなきゃだけど、川が増水
してて橋が流されちゃってる。

役場に電話して直してもらうけど、それまでは町に行くのになら
り遠回りになるぞ」

ヴァイデは濡れた靴を引つ繰り返して中の水を捨てている。

また掃除をしなければ、と顔をしかめるフィーアに脱いだレイン
コートを渡し、自身は首からタオルを提げて自分の部屋へと歩いて
いった。

フィーアもその後ろからついていく。

ヴァイデの部屋はトイフェルの部屋の近くだった。

そこで雨と泥ですっかり汚れてしまった服を着替えたヴァイデに、持っていたレインコートを返す。

それを暖柱の近くに引っ掛けて、ヴァイデはフィアと一緒に一階に降りていった。

「橋が流されたって……どうすんだよ？」

客たちが午後の講義に行っている間、グランツたちは食堂でパスを啜っていた。

ヴァイデは客人には橋のことを言わず、グランツとミールランに話したのだ。

無人島に取り残された訳じゃなし、反対方向にも大きな町がある。遠回りだが、そちらに行けば川の上流を渡る汽車が出ているのだ。

「そんなに心配しなくても平気だろ。とりあえず、町役場には連絡したから、雨が止み次第橋の修理に来るだろう」

橋が直るのはしばらく先だろうが、帰りはヴァイデが皆を反対側の町に送って行けばいいだけのことだ。

食べ物についても問題ない。

食料は少なくとも一週間は保つくらい買い込んであるし、それにいざとなれば裏の森で狼や熊を狩ってくれば良い。

差し当たって問題になるのは、急病人が出たときなどだが、そのときはそのときである。

少し時間はかかるが、向こうの町まで行けば済む話だ。

「無駄に話して不安を煽る必要もないわね」

「まあ……それもそうだな」

ひとまず納得したところで、グランツはパスタの最後の一本を啜った。

午後からは明日の講義で使う、北側の実験室の整備をしなければならぬ。

細かな機材の調整はヴァイデに任せるとして、またメインの仕事は部屋掃除になるだろう。

早くも面倒になってきて、グランツは小さく溜め息を吐いた。

「おら早くそっち持て！　いくぞ。せーのっ」

「うをををを重っ！」

ヴァイデとグランツは、不要な機材を実験室から運び出す作業をしていた。

屋敷の主であるトイフェルが、あれもこれもと色々取り寄せた結果、実験室には所狭しと用途不明の機械が置かれていたのだ。

講義の参加者がこの部屋に入り、トイフェルの研究を見学できるようなスペースはない。

まずは邪魔な機材を退かすことから始めなければならなかった。

「ぶつけるなよ。壊したら弁償な」

「ちなみに、幾ら？」

「七百万」

「絶対に壊しません」

重い機械を抱えて、よろよろとグラントたちは隣の部屋へ歩いていった。

フィーアは洗い場に干してあった洗濯物を取り込んでいる。雨のせいではなかなか乾かないため、暖柱の熱量を調節して乾かしているのだ。

綺麗に畳んでリネン類をまとめてある部屋に持っていく。ついでに、客人から頼まれていた洗濯物も各部屋に届けて回った。その帰り、参加者たちが講義室から出てくるのが見えた。講義は途中休憩を挟みながら行われる。

今が丁度その時間なのだろう。

ミーランがお茶とお菓子を持って広間に入っていく。

客人たちもそこへ向かった。

フィーアが二階から降りてくると、丁度講義室側の通路からトイフェルが出てきた。

片手で肩を押さえながら首を回していたトイフェルは、階段前のフィーアと目が合っただけと動きを止める。

トイフェルは、グラントとは顔を合わせたか、フィーアの姿を見るのはこれが初めてだ。

フィーアが屋敷に来てからというもの、偶然トイフェルから離れた場所での仕事が多かったため、今まで顔を合わせる機会がなかったのだ。

二人は互いの姿を見て、同じタイミングで目を見開いた。
そして、やはり同時に息を呑む。

「きみは……」

「あなたは……」

これまた二人同時に呟き、相手を凝視したまま固まってしまった。
そのまま、しばしの時が流れる。

「おいフィア、こっち手伝ってくれよ」

北の通路からグランツの声が聞こえてきた。

フィアは金縛りが解けたようにはっとして、トイフェルに小さな会釈をしてその場から走り去った。

フィアの後ろ姿を見送ったトイフェルは、口許に手を当て笑みを浮かべる。

「先生、お茶冷めちゃいますよー？」

広間からリーリエが顔を覗かせる。

トイフェルは笑みを消し、片手を挙げてリーリエに答え、広間に入ってしまった。

フィアは急いでグランツの許へ戻ってきた。

心なしか、顔色が悪い。

グランツは少し屈んでフィアの顔を覗き込んだ。

「どしたフィーア？　どっか、具合悪いのか？」

「いえ……大丈夫です」

フィーアは小さく首を振り、足早に部屋の中へと消えた。

グランツは訝しげに眉をひそめながらも、フィーアに続いて実験室に入る。

機材の運び出しも、もうすぐ終わりそうだった。

「先生、ご機嫌ですね。何かあったんですか？」

午後の講義も無事に終わり、トイフェルと受講者が夕食をとっている間、トイフェルは始終ニコニコしていた。

思い返してみると、午後の休憩を挟んだ後からずっと楽しそうにしていた気がする。

フォルターはテリーヌを切り分けながら、トイフェルに話し掛けた。

「ん？　いや、告知もしていない小さな講習会に四人も集まってくれたからね。いつもなら二人来れば良い方なのに」

上機嫌でワインを飲むトイフェルを見て、シュレッケンはふんと鼻を鳴らした。

「相変わらずの人嫌いのようだな。何で講習会なんぞ開こうと思ったのかね」

付け合わせの人参を豪快に口に放り、シュレッケンは嫌味ったら

しく呟く。

それを聞き咎めたのはツアルトだ。

「まあまあ。先生は、連盟から賞を頂いてるので、後進の育成のために勉強会を開かないといけないんですよね」

「うん、そうなんだ。それが面倒でね。一人でも参加者が来ればパスできるから、こっそり開催して少人数で済ませてるのさ」

ツアルトはトイフェルを尊敬している。

彼のトイフェルを見る瞳は輝いていた。

シュレツケンはずっと正反对で、苦々しげにトイフェルを睨み、再度鼻を鳴らしてパンを干切った。

「勿体なあい。先生の講義面白いんだから、もっと色んな人に見せるべきですよー」

リーリエは紅茶を飲みながらトイフェルを見やる。

彼女は、魔律協会首席でありながら科学にも興味があるようで、

トイフェルの説明に何度も食い付いて質問していた。

魔律術士独特の目線で鋭い質問をされ、トイフェルも答えるのに苦労していたようだ。

「ははは、きみのような優秀な子には楽しいだろうけど、先生の話は高度すぎてね、私にも理解できない部分がありましたよ」

笑いながらそう言うのはフォルターだ。

トイフェルと同じく医療科学を専攻しているが、トイフェルの義肢部門とは違い薬剤部門であるため、話についていくのがやっとだったと談笑する。

ヴァイデは彼らの話の邪魔をしないように、静かに空いた皿を下げて回る。

そこにグランツが木の実のジェラートを出して回った。
フィアはいない。

何故か午後から調子が悪くなったらしく、部屋で休んでいた。

灯りも点けずベッドに腰掛け、両手で口許を覆って目を瞑る。

カタカタと小さく震える身体を落ち着かせようと、細く長く息を吐いた。

窓の外は既に暗くなっている。

先程まで煩かった雨音は、気付けば小さくなっていた。

「おいフィア？ どうした灯りも点けないで」

部屋のドアが開いて、グランツが顔を出した。

壁を探り、電球のスイッチを入れる。

白熱電球の薄いオレンジ色の灯りが室内を照らした。

フィアが振り向くと、グランツはパンとスプーンが乗ったトレイを持って立っていた。

後ろ手にドアを閉める。

トレイをテーブルに置いてから、グランツはフィアに近寄った。

「大丈夫か？ まだ具合悪い？」

「は……いえ、大丈夫です。すみません」

頷きかけて、咄嗟に首を振った。

グランツは疑わしそくにフィアを見下ろし、徐に額に触れる。

「熱はないみたいだな」

「大丈夫です。もう何ともありませんから。ご心配おかけして、すみませんでした」

グランツの手から逃げるように首を振り、フィーアは微笑んでみせた。

グランツは納得していないようだったが、それ以上詮索するつもりはないようだ。

「飯もらってきただけ、食べるか？」

「はい……ありがとうございます」

フィーアは立ち上がり、テーブルの前の椅子に腰掛ける。湯気の立つスープのカップを両手で包み、ふうと息を吹き掛けた。フィーアの吐息に合わせて白い湯気がゆらゆらと揺れる。

「あ、雨……」

フィーアの隣に座ったグランツが、不意に窓の外を見て声を上げる。

つられてフィーアも窓を見た。

「止んだみたいだな」

窓を叩く雨の音は、いつの間になくなっていった。

翌朝、講義の二日目。

食堂に集まったのは、トイフェルとツアルトとリーリエ、それにシュレツケンだけだった。

中々降りてこないフォルターを呼びに、グランツが彼の部屋に様子を見に行った。

「おはようございまーす。フォルターさーん？」

ドアを叩きながら呼ぶが、部屋の中からはまったく返事がない。余程ぐっすり眠っているのか、或いは返事ができない状態になっているのか。

もし、病気か何かで倒れているのだとしたら大変だ。グランツは急いでドアを開けた。

「フォルターさん！？」

しかし、やはり部屋の中から返事はなかった。

それどころか、部屋の中には誰もいなかったのだ。

部屋中を捜してみたが、どこにもいない。

グランツはとりあえずヴァイデに報告するため、急いで一階に降りていった。

「フォルターさんが？」

「部屋にはいないみたいなんだよ。他の部屋も捜してみるけど、お客さんたちにも訊いてみてくれないか？」

グランツから話を聞いたヴァイデは、すぐに食堂にいる客人たち

に話を訊きにいった。

その間に、グラントは一階の部屋を捜しに行く。
何故か、胸の奥がざわざわしていた。

食堂では、ヴァイデが客人たちに事情を話しているところだった。

「どうも、フォルターさんの姿が見えないようなんですよ。部屋にもいないらしくて、皆さん心当たりありませんか？」

その場にいた人は皆、お互いに顔を見合わせた。

朝食を並べていたフィーアも、驚いたようにヴァイデを見ている。

「あたしは見てないけど……」

「その辺にいるんじゃないかね？」

「ボクも見えていません」

「どうしたんだろうねえ？」

皆、心当たりはなさそうだった。

これ以上訊いても、何ら情報は手に入らないだろう。

朝食の用意はフィーアに任せ、ヴァイデも屋敷の中を捜しに行くことにした。

「いたか？」

「いや、いねえ。こりゃ、屋敷の中にはいねえんじゃないかね？」

先に屋敷の中を捜していたグランツに訊くが、やはりフォルターは見付からないようだ。

いくら広い屋敷とはいえ、限られた敷地で見付からないはずがない。

屋敷の外に出ていると考えるのが妥当だろう。
グランツとヴァイデは、外へと走りだした。

昨日までの豪雨が嘘のように、空は青く晴れ渡っている。

雨上がりの森特有の、湿った緑の匂いがした。

針葉樹の多い森は、冬も近くなったこの時季でも、未だ緑の葉を付けている。

グランツたちは、屋敷の裏手へと走った。

屋敷の近くから、徐々に森の奥へと搜索範囲を広げていく。

この森には狼が出るのだということを思い出し、グランツは背筋が寒くなるのを感じた。

またしても、うっかり銃を置いてきてしまったのだ。

丸腰の状態で狼の群れに襲われたら、ひとたまりもないだろう。

それはフォルターも同じだ。

もしかしたら、もう狼に襲われているかもしれない。

それで今朝から姿を見せなかったのだろうか。

嫌な想像を打ち払うように、グランツは更に奥へと向かう。

泥に足を取られながらも茂みを掻き分け、そこで足が止まった。
目的の人物を発見したからだ。

だが、グランツの目は驚愕で見開かれていた。

朝の冷たい日差しが降り注ぐ中、フォルターは太い木の幹にもた

れ掛かっていた。

否、木の枝から吊り下げられていたのだ。

その身体には鋭い刃で斬られたかのような傷痕が、いくつも作られていた。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n0124o/>

TRUE WISH

2010年10月11日00時46分発行